

中国仏教における因縁物語集

『金蔵論』に引用される『雑宝蔵経』について――

宮 井 里 佳

一

『金蔵論』は、北朝末期（六世紀後半）に道紀によって編集された経典である。その形式は、さまざまな仏教経典の中から抄出した要文を、その出典を明記しつつ、テーマ（「縁」）ごとに収録した、いわゆる「類書」と称されるものである。

『金蔵論』は、『賢愚経』や『撰集百縁経』、『雑宝蔵経』といった譬喩経典すなわち因縁物語集から多く抄出引用しており、因縁物語の集成となっている。『金蔵論』を中国仏教史上にどのような位置づけるか、これまで類書の歴史の観点などから考えてきたが、これから因縁物語集との関係から考えていきたい。

そこで本稿では、因縁物語集である『雑宝蔵経』を取り上げることにする。

二

『雑宝蔵経』十巻は二二一話より成り、『大正蔵』四巻本縁部所収の譬喩経典である。北魏の延興年間（四七一～四七六年）に吉迦夜・曇曜によって漢訳されたとされる。⁽²⁾

『金蔵論』と『雑宝蔵経』とは、各話の題名が「縁」であることが共通している。『撰集百縁経』も同じであるが、『賢愚経』などが「品」、『百喩経』が「喩」であるのは異なる。

『金蔵論』は二二の章に分かれ、以下のとおりそれぞれ章題が付されている。

邪見縁第一	殺害縁第二	罵詈縁第三
懺悔縁第四	称佛縁第五	観像縁第六
聴法縁第七	求法縁第八	戒縁第九
食縁第十	業縁第十一	布施縁第十二
慳縁第十三	塔縁第十四	像縁第十五

- 香花縁第十六 燈縁第十七 幡蓋縁第十八
- 出家縁第十九 袈裟縁第二十 孝養縁第二十一
- 雜縁第二十二⁽³⁾

一方、『雜宝蔵経』は章に分かれていない。しかし、内容的にはある程度まとまりがあると考えられる。以下に岡教遂氏による五分類を挙げる。

- 孝養篇 誹謗篇 施行篇 教化篇 鬪諍篇⁽⁴⁾

この五分類は、順序は異なるが、大きく見れば『金蔵論』の章の内容とも共通する。このことは、因縁物語集が包摂する説話ないし分類について想起させるものがある。

さて、『金蔵論』七卷(あるいは九卷)中、現時点で判明している『雜宝蔵経』を出典とする話は以下のとおりである。⁽⁵⁾

- 月氏國王與三智人作親友縁 卷二 懺悔縁第四第一話
- 女人至心求法得道縁 卷二 求法縁第八第一話
- 須達長者夫婦施食得現報縁 卷三 食縁第十第三話
- 貧人施麩現作國王縁 卷三 食縁第十第六話
- 闍夷羅夫婦自責設會得現報縁 卷三 食縁第十第七話
- 波斯匿王二内官諍依王不依王活縁 卷三 業縁第十一第一話
- 波斯匿王女善光答父由業不因王縁 卷三 業縁第十一第二話
- 貧女兩錢施僧現作大王夫人縁 卷四 布施縁第十二第三話
- 惡生王過去三錢施僧得報縁 卷四 布施縁第十二第五話
- 婦憶夫掃治塔寺得生天縁 卷五 塔縁第十五第七話
- 優陀羨王婦一日出家得生天縁 卷六 出家縁第二十第四話
- 鸚鵡孝養盲父母得成佛縁 卷六 孝養縁第二十二第一話

慈童女孝養得現報縁 卷六 孝養縁第二十二第三話
 この中の「慈童女孝養得現報縁」を取り上げて、『雜宝蔵経』と『金蔵論』とを比較考察する。

三

『雜宝蔵経』第七話「慈童女縁」⁽⁶⁾を抄出したものが『金蔵論』卷六の孝養縁第二十二第三話「慈童女孝養得現報縁」である。次に両経典を比較対照する。

『金蔵論』

『雜宝蔵経』

慈童女孝養得現報縁	(七) 慈童女縁
出雜寶藏經略要	
佛言、若人於父母所、少作供養、獲福無量。少作不順、罪亦無量。	昔佛在王舍城、告諸比丘、於父母所、少作供養、獲福無量、少作不順、獲罪無量。諸比丘白佛言、世尊、罪福之報、其事云何。
我於過去久遠世時、生波羅奈國、爲長者子、字慈童女。其父早喪、與母共居。家貧賣薪、日得兩錢、奉養於母。方計轉勝、日得四錢、以供於母。遂復漸差、日得八錢、供養於母。後人投趣、獲利轉多、	佛言、我於過去久遠世時、波羅奈國有長者子、名慈童女。其父早喪。錢財用盡。役力賣薪、日得兩錢、奉養老母。方計轉勝、日得四錢、以供於母。遂復漸差、日得八錢、供養於母。轉爲衆人之所體信、遠近投趣、獲利轉多、日十六錢、奉給於母。衆人見其聰明福德、而勸之言、汝父在時、常入海採寶。汝今何爲不入海也。聞是語已、而白母言、我父在時、恒作何

<p>汝昔兩錢、供養母故、得琉璃城、四如意珠、及四玉女、四萬歲中、受其快樂。四錢供養母、得頗梨城、八如意珠、及八玉女、八萬歲中、受諸快樂。八錢供養母、得白銀城、有十六如意珠、十六玉女、十六萬歲、受於快樂。以十六錢、供養母故、得黃金城、有三十二如意珠、三十二玉女、三十二萬歲、受大快樂。以絕母髮、今得鐵城、火輪之報。有人代汝、乃可得脫。復問獄卒、今此獄中、頗有受罪、如我比不。答言、無量不可稱計。聞已念言、我會不免。願使一切應受苦者、盡集我身。作是念已、鐵輪即墮。獄卒見已、鐵釵打頭。尋即命終、生兜率天。</p>	<p>八錢供養母故、得白銀城、十六如意珠、十六玉女、十六萬歲、受於快樂。十六錢供養母故、得黃金城、三十二如意珠、三十二玉女、三十二萬歲、受大快樂。以絕母髮故、今得戴鐵火輪、不曾墮地。有人代汝、乃可得脫。又問言、今此獄中、頗有受罪、如我比不。答言、百千無量、不可稱計。聞是語已、即自思惟、我終不免。願使一切應受苦者、盡集我身。作是念已。鐵輪即墮地。慈童女語獄卒言、汝道此輪、不曾有墮。今何以墮。獄卒瞋忿、即以鐵叉、打童女頭。尋便命終、生兜率陀天。</p>
<p>佛告比丘、昔慈童女、</p>	<p>欲知爾時慈童女者、即我身是。諸比丘當</p>

<p>今我身是。以是因縁、於父母所、少作善惡、獲報無量。是故應勸供養父母。成實論說、如於佛諸聖人、及父母等、起善惡業、則受現報。</p>	<p>知、於父母所、少作不善、獲大苦報、少作供養、得福無量。當作是學、應勤盡心奉養父母。</p>
--	--

以上の対照から、『金藏論』は『雜寶藏經』の字句を相当忠実に用いながらも短略化しており、また四字句を重視していることがわかる。また最後の方、因縁物語に見られる現在物語と過去物語との「連結」の部分に相当する「佛告比丘、昔慈童女、今我身是。以是因縁、於父母所、少作善惡、獲報無量。是故應勸供養父母」の箇所は、「昔○○〔者〕今我身是。以是因縁」という定型的な表現が用いられている。さらに、末尾に「成實論說、如於佛諸聖人、及父母等、起善惡業、則受現報」と評語とも言うべき、因縁物語のまとめに相当する一文を他の經典から抄出引用する。これは『金藏論』において時に見られる特徴である。以上の比較から、『金藏論』は『雜寶藏經』よりもコンパクトかつ形式が整った因縁物語を収録していると言える。

四

因縁物語集と『金藏論』との関係を考える端緒として、『雜

『宝蔵経』を抄出引用した一話を取り上げて考察した。

この問題を考えるに当たって、船山徹氏によって近年提唱されている「漢訳編輯経典」または「中国編集（編輯）経典」という概念が興味深い。中国仏教経典（漢文仏典）は従来、漢訳と中国撰述（疑経、偽経、疑偽経）との分類で考えられてきたが、「漢訳とも中国撰述とも厳密には言えないような中間的形態」があり、それを「中国編集経典」と仮称しているのである（船山二〇〇二）。船山二〇一〇では、「翻訳を編輯して作成した経典——漢訳編輯経典」として七種を挙げる。⁽⁸⁾
 I抄経、II異訳合本、III法数・仏名関連経典、IV譬喩経典、V戒律儀礼・瞑想法等の実践手引書、VI伝記、VIIその他、⁽⁹⁾である。⁽¹⁰⁾

今回取り上げた『雑宝蔵経』はIV譬喩経典の一つであり、中国で編集された経典である。⁽¹¹⁾それら中国で編集された譬喩経典（因縁物語集）たちの抄出から成る『金蔵論』は、譬喩経典類の抄経と言え、したがって少なくとも二段階の編集過程を経て成立した経典だと言える。⁽¹²⁾さらに、唐代に編集された仏教類書である道宣撰『諸経要集』や『法苑珠林』は『金蔵論』の同文的同話を多く含む。このことから、因縁物語集の類書とも言える『金蔵論』などの成立が仏教的知識を網羅する『法苑珠林』などの類書へと発展していった可能性がうかがえる。

中国仏教における因縁物語集（宮井）

以上のように、インド原典を基として『雑宝蔵経』など因縁物語集（譬喩経典）群が編集され、それらの抄経集（要文集）・類書的な経典が編集され、それらを統合して仏教類書が編集されるという仮説を現在立てている。今後、この仮説の妥当性を検証していきたい。まずは『金蔵論』が抄出引用している因縁物語集について検討を続け、中国仏教における因縁物語集の編集について考察したい。また、因縁物語が語られる場であった唱導の儀礼についても併せて考察を進めていきたい。

- 1 宮井里佳・本井牧子二〇一一、研究編第二部第二章「『金蔵論』の位置づけ」（宮井）。
- 2 「雑寶藏經十卷（後魏延興年沙門吉迦夜共曇曜譯）」（法經等撰『衆經目錄』卷三、『大正蔵』五五卷二二八頁上段）。
- 3 インド原典の存在は知られていない。
- 4 梵魚寺本巻頭の目次による。
- 5 『佛書解説大辞典』「雑寶藏經」条。
- 6 同氏による『国訳一切経』解題には、この五分類をもう少し詳細に、例えば施行篇を施行篇、施行生天篇、施行雜篇に分けるなどしている。
- 7 これに基づき、梁麗玲一九九八、本多二〇一二においても独自の分類がなされている。
- 8 『金蔵論』は中国の経録には記載されておらず、夙に散逸した。昭和初に日本古写本が発見され、二一世紀になって荒見泰史氏によって敦煌写本が、南權熙・崔鋈植氏によって韓国

版本が発見された。宮井・本井二〇一一では『金藏論』現存写本・刊本を次のように整理し、本文を提示した。

大谷大学蔵写本(谷大本)(巻一・二)

京都大学附属図書館蔵写本(京大本)(巻一・二)

韓国梵魚寺蔵木版本(梵魚寺本)(巻一・二)

興福寺蔵『日本靈異記』紙背本(興福寺本)(巻六)

敦煌本A……北京一三二二・俄藏P_x〇〇九七七・北京大學D一五六(巻五・六)

敦煌本B……北京八四〇七(巻五・六)

敦煌本C……スタイン本三九六二(巻五)

敦煌本D……スタイン本四六五四(巻六)

刊行直後に韓国版本巻三・四合本発見の報があり、その後、一部紙焼きを南権熙氏より落合俊典・藤本幸夫氏を介してご提供いただいた。

貴重な資料を拝閲する便をはかってくださった方々に心より感謝申し上げます。

6 『大正蔵』四巻、四五〇頁下段〜四五二頁下段。

7 岩本一九七八、一七〜一八頁参照。

8 船山二〇〇二、二〇〇七②においても同様の分類が挙げられているが、それぞれ順序・内容が異なるので、船山二〇一〇を引用した。

9 VIIその他の例として鳩摩羅什訳『成実論』が挙げられている。

『成実論』は漢訳版と同一の原典は存在しない。『高僧伝』巻六曇影伝によれば、曇影が「内容を総論的な事柄と四聖諦のそれぞれに関する事柄の五種に分け、初訳の問答を並べ替えたテキストを作成した」ものであるという。『金藏論』を編集した道紀がもと『成実論』を講じていた(『統高僧伝』巻三十、道

紀伝)ことを注意しておきたい。

10 同様と思われる指摘がある。「疑偽經典に記載される典籍の中でそうした経律論の範疇に入りにくいものに抄経がある。抄経は、翻訳後の再編集という観点からすれば、同様な過程を経て複雑な様相を呈する譬喩経類とも関わっており、別個に扱うべき問題である。」(大内二〇一三、第一章「中國撰述佛典と讖緯——典籍聚散の歴史を契機として——」三二頁(元論考は一九七四年))。

11 『雜宝藏経』の訳者とされる北魏の吉迦夜・曇曜は、『付法藏因縁伝』の訳者ともされている。『付法藏因縁伝』は中国において編集が加えられた可能性があるVI伝記の一つである。北魏の仏教において行われた經典編集の中心人物として曇曜(および吉迦夜)に今後注目して考えてみたい。

12 『金藏論』は「道紀撰」と記述される。これは船山二〇一〇が編輯(編集)を意味する語として、「撰」「撰出」「撰述」「撰集」「抄」「抄集」「抄撮」「撮略」「略撮」「整理」などを挙げていることにも合致する。

『金藏論』の編集方法については、道紀が各説話それぞれを出典となる經典から抄出して編集集成した可能性もなくはないが、各章(縁)あるいはいくつかの章毎に元となる抄経集があり、それらを編集集成した可能性が考えられる。それは、抄経集類が現存していない現在は立証できないが、各章の出典となる經典群の傾向や『金藏論』と同文的同話を含む『法苑珠林』との比較から想像される。そうなれば、三段階以上の編集過程を経て成立したことになる。

〈参考文献〉

- 岩本裕一九七八 『佛教説話研究第二巻 佛教説話の源流と展開』、開明書店
- 大内文雄二〇一三 『南北朝隋唐期佛教史研究』、法藏館
- 落合俊典二〇〇六 「漢訳經典の生成と要文集の編集——『法苑珠林』以前の世界——」、『小野随心院所蔵の文献・圖像調査を基礎とする相関的・総合的研究とその展開』（平成十七年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究報告書）Vol.1
- 広島大学敦煌学プロジェクト研究センター
二〇一三 『第二回東アジア宗教文献国際研究集会唱導、講経と文学報告書』
- 船山徹 二〇〇二 「漢訳」と「中国撰述」の間——漢文仏典に特有な形態をめぐって——、『仏教史学研究』四五—一
- 二〇〇七① 「經典の偽作と編輯——『遺教三昧経』と『舍利弗問経』——」、京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』、臨川書店
- 二〇〇七② 「六朝仏典の翻訳と編輯に見る中国化の問題」、『東方学報』第八〇号
- 二〇一〇 「仏典漢訳史要略」、『新アジア仏教史六 中国I 南北朝』第五章（佼成出版社）
- 本多至成二〇一二 『『雜宝藏経』の研究』、永田文昌堂
- 宮井里佳・本井牧子二〇一一 『金藏論 本文と研究』、臨川書店
- 梁麗玲一九九八 『『雜寶藏経』——及其故事研究——』、中華佛學研究所論叢一五、法鼓文化

〈キーワード〉

『金藏論』、『雜宝藏経』、仏教類書、因縁物語、抄
經
(埼玉工業大学教授)